

1. 教育の責任

この科目は教員養成と保育士養成との2つの免許・資格に関連したもので、いずれにおいても必修の科目として位置づけられている。ところが、2つの課程においてこの授業に求める内容の違いに頭を悩ませてきた。

教職課程における「教育心理学」では、「幼児、児童および生徒の心身の発達及び学習の過程」と題されており、コアカリキュラムによると大きくは子どもの発達と学習の2つの領域から成り立っている。

これに対して、保育士養成課程における科目構成では2017年までは心理系の科目は「保育の心理学Ⅰ」と「保育の心理学Ⅱ」に分けられており、前者では主に人間の発達を中心に講じられ、後者では前者の内容を受けて発達への支援の領域を中心に講じられてきた。

本学では「教育心理学」を開講するにあたって、この科目を保育士養成課程における「保育の心理学Ⅱ」として位置づけ、教育課程を展開してきた。しかし、これまで説明してきたとおり、教職課程での学習中心の内容と、2つめの到達目標に「生活と遊びを通して学ぶ子どもの経験や学習の過程を理解する」と書かれてはいるものの保育士養成課程での発達への支援の領域の間に乖離を感じ、授業の中でどのような内容を展開すべきか悩むところであった。2018年の保育士養成課程のカリキュラム改訂において、保育の心理学はひとつにまとめられ、教職課程と同様に発達の理解と学習(学び)の過程の理解という2つの領域にまとめられることになった。従って、「教育心理学」では教職課程においても、保育士養成課程においても、ほぼ同一の内容で展開できることになっている。

この科目は本学のカリキュラムツリーの中で「教育・保育の対象の理解に関する科目」として位置づけられ、保育コースの「3. 保育者としての専門的知識や実践的技能を修得し、様々な側面から子どもを理解し、国際・地域社会における今日的なニーズに対応できる人」、教育コースと擁

護コースの「4. 基礎・基本の学力とともに、専門的知識や実践的技能を身に付けようと努力する人」、という学習成果と関連している。

2. 教育の実施における理念

今日、将来を担う子ども達に求められる資質を養うものとして「主体的で、対話的な、深い学び」求められている。この先教育に携わる者として子どもの発達や学習に対する支援をおこなっていくうえで、必要とされる社会の現状や人間の心理に関する、幅広い俯瞰的な知識や問題解決の考え方等について、学生自身がその必要性を認識し、自らの力で主体的に、深く学んでいくことを重視していく。

また、知識の詰め込みに偏ることは避けるべきところではあるが、将来教育の現場で、周りの教員や支援者と疎通が可能となるための基本的な知識や情報を身につけると同時に、自らの子ども観を作り上げるために必要な経験や情報を提供するため、情報伝達型の要素を主とする授業をおこなっている。また、授業者は子ども観の形成においては多様な視点の形成が不可欠であると認識しており、本授業と授業者が担当する他2つの心理系の授業だけではなく、隣接する科目である「障害児保育」、「幼児理解の理論と方法」、「教育相談」等の関連する他の科目と連携しながら、学生自身の子ども観形成に向けて、それぞれが補完的な役割を果たしていく必要を認識している。

3. 教育の方法

展開時期は1年次の前期となる。短大に入って最初の学期であり、卒業必修の科目であることから、2年次開講の科目と比較して、講義内容に加え説明や連絡など多くくり返しながら丁寧におこなっている。授業内容に関してもある程度の質を担保するため、毎回授業内容の確認テストを実施している。定期試験に関しても、試験範囲や形式を詳細に説明した後、基準に到達しなかった学生には複数回の補習授業と再試験を実施し対応している。

4. 教育の成果

・小テストから

この授業ではこれまで授業内容の理解度を確認する目的で小テストを実施してきた。今年度も、15 回の授業を通して全10回の小テストを実施している。小テストは基本的次回の授業の冒頭に実施し、採点した前回の分を返却した後、問題の解説と前回の授業の振り返りをおこなっている。採点の問題もあり、選択肢としての語群を設けた客観テスト形式で出題している。

全回を通しての平均点は10点満点で 6. 4 点であった。授業実施前に設定した目標の 8 割には届かなかったが、原因の分析が必要だと捉えている。昨年度のポートフォリオでも言及したが、例年 1 年次の小テストでは、平均点 6 点台に留まっており、2 年になると 1 年次と比較して復習に注力できるようになる傾向からか平均点が 7 点台へと上昇する傾向が見られている。毎回誤答分析をおこなっており、多くの学生が誤答した問題は、「問題の意図が分かり難かったのではないかと推測されるもの」と「解答者の理解が不十分なもの」とに分けて捉えることができる。後者と想定されるものに対して、次回の授業の冒頭部で、復習をするなどの対応をおこなっている。また、前者については、これまで経年で問題を蓄積し、よりわかりやすい設問を工夫している。

・コース別の平均点

今回の学年では 3 コース制となったこともあり、コース別の平均点を比較した。これまで、保育コースと教育コースでは平均点がかかなり異なっており、1 年次では教育コースが平均点で 1. 5 点以上高い値を示している。

令和 4 年度の「教育心理学」の授業の中でおこなった小テストの成績についてコース別の成績を下表に示した。

表 「教育心理学」小テスト成績の比較(10 点満点)

成績	①	③	⑤	⑦	⑨	平均
保育	5.5	5.6	4.8	5.9	6.2	5.7
教育	6.7	7.4	6.1	6.6	7.2	6.9
養護	5.7	6.2	5.4	6.0	6.4	5.9

大まかな傾向を掴むために、10 回中 5 回分を取り出して、記載している。また、10 回通しての平均点も記載した。先述した通り、平均点は高い方から教育コース>養護コース>保育コースの順となった。教育、保育の両コース

に関しては、これまでと同様の結果となった。今回新たに加わった養護コースは、10 回を通して教育コースと保育コースのほぼ中間に位置することとなった。この傾向は平均値においても同様に見られている。

令和 4 年度「教育心理学」成績分布(数値は%)

	秀	優	良	可	人数
保育	25.0	16.7	0	58.3	24
教育	28.6	38.1	19.0	14.3	21
養護	17.1	22.9	14.3	45.7	35

同時に成績分布について見ると、秀と優の割合に関しては教育コースが最も大きく保育と養護のコースは同程度となっている。また、教育コースは可の割合が他コースと比較して低い値であることがわかる。

この科目に関しても、昨年度取り上げた保育の心理学と同様に各評価値の正規分布からの外れの度合いが若干大きくなっている。次年度以降も、比較を継続し、絶対評価の成績評価を相対評価の値に近づけるように工夫をしたい。近年、大学の成績評価において、各教科での成績の平準化が求められるようになっているが、到達目標を考慮しつつ、平準化にも取り組んでいきたい。

5. 目標

昨年度も言及しているが、授業の方法に対する振り返りでは、授業者のこれまでの傾向であった「授業内容や方法が原則や抽象的な知識の詰め込みに偏重している」いう傾向からは脱却できていない。アクティブラーニングの手法のより一層の導入が急務である。